様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２１０６

研究課題名（和文）「ファンタスマタの世界」－西田幾多郎における美学と時間論

研究課題名（英文）A World of Phantasmata - Nishida's Aesthetics and Theory of Time

研究代表者
ＦＯＮＧＡＲＯ　ＥＮＲＩＣＯ（FONGARO, ENRICO）

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：９０４５７１１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、今まであまり研究が行われてこなかった西田幾多郎の美学について、時間論からのアプローチを行ない、 同時に関連文献をイタリア語に翻訳した。その作業に付随して、西田の思想の発展に伴う芸術哲学の変化を、時間論との関係において論考することを試みた。本研究成果の一部として、西田全集イタリア語版の第1巻として『善の研究』(2016, 改訂版)、第２巻として『思索と体験』(2019)をイタリアで出版することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
西田の美学に特徴的なのは、芸術を「身体の活動」とその時間性ととらえている点である。しかしながら、本申請課題のように西田の美学と時間論について、西洋美学の観点から比較分析するという試みはこれまでほとんど行われておらず、海外においても日本学のみならず、芸術学、哲学諸分野の研究者らに、新しい興味と大きなインパクトを与える可能性がある。また、本課題遂行によって、西田の重要な著作である『善の研究』、『思索と体験』のイタリア語翻訳および解説を出版し、ヨーロッパに紹介した。イタリア語というヨーロッパの言語で翻訳を出版することにより、他の欧米諸国や中南米における日本哲学への接近をも促すことができると考える。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to deal with the aesthetics of Nishida Kitaro, a topic that is not very discussed in the past studies on Nishida. I tried to think about the transformation of Nishida's philosophy of art in relation to his theory of time, according to the evolution of his thought. At the same time, I translated into Italian and published some texts, a part of which were the first (An Inquiry into the Good, 2016, revised translation) and the second (Thought and lived experience, 2019) volumes of the Italian edition of Nishida's Complete Works.

研究分野：哲学

キーワード：日本哲学　西田幾多郎　時間論　美学　翻訳

１．研究開始当初の背景

本研究では、先行する科研費採択課題「「現在の平面」―西田幾多郎における時間論と存在論」（基盤 C、研究代表者フォンガロ　エンリコ、平成 25−27 年）において得られた研究成果を継承し、発展させたものである。研究代表者はこれまでに、西田幾多郎の各時代の著作において、「時間」がどのように捉えられているかを、イタリア語に全訳しながら分析してきた。その過程において、西田が前期から後期へと独自の哲学を発展させながら、プラトン主義的な「永遠」から、それとは異なる「現在の平面」のような「永遠の今」の非形而上学的な時間論へ進んでいったということが分かってきた。西田の時間論の中には、晩年のデリダの「幽霊」が中心になる時間論と非常に近いものがあり、また彼の美学・芸術論が密接につながっていることが明らかになってきたため、白隠、デリダにおける「幽霊」と比較した論考を行うことができると考えた。

西田の著作には、「「芸術哲学」としての独立のものはない」（[1]p.408）とされるが、初期から晩年までの全ての時代において、芸術に関する記述は多く見られる。初期には美学に直接関連する『芸術と道徳』（1923 年）があり、西田とフィードラーやカントとの比較研究は国内外ですでにいくつか行われてきた（例えば[2][3]）。しかし、西田晩年の芸術論についての研究はほとんど見当たらない。

「西田の思索全体にわたって芸術は宗教とともに、常に大切な箇所で、自分の思想の正当性を確認する＜例証＞として取り上げ」られている（岩城[1]pp.408-437）。研究代表者は前課題によって時間論の分析を進めるうちに、岩城が述べる以上に「「芸術哲学」は、哲学的思索全体と絡み合っている」　（[1]p.408）ことを確信した。つまり、「時間的できごとでそのまま直ちに絶対現在の平面に映して見られる立場が詩的直観の立場である」（[1]p.320）ため、西田の時間論を考えるためには、存在論だけではなく、芸術論（美学）の観点からも検討することが必要であることを再確認した。逆に言えば、西田の美学には時間論からのアプローチが不可欠であるということである。

研究代表者は、過去 10 年以上にわたり、西田幾多郎全集のイタリア語翻訳に従事しており、その作業の過程で、西田のすべての時代における時間論を著作から丹念に取り出し、ベルグソン、アウグスティヌスや 1920 年代のハイデッガーらと比較する作業を積み重ねてきた。初期『芸術と道徳』では、時間と芸術的経験・体験が厳密に結びついており、芸術的作用は時間的性質を持つと考えられている。そうであれば、後期の西田において変容した彼の時間論は、当然ながら芸術的作用の理解にも変化を与えているはずである。このような観点から「歴史的形成作用としての芸術的創作」（1941 年）を読むと、西田の晩年の芸術論は意外にもヴァールブルク（Aby Warburg）の美学との共通点が多く見られることに驚かされた。西田は「ヌース・パテティコスの立場から、我々の目が世界の目となることでなければならない」（[2]p.320）と言及しており、芸術作品は「世界の客観的な表現」として考えられている。以上のような背景から、西田の時間論について、西洋美学の観点から比較考察を試みることでさらに新たな発見がありえるであろうと考えた。

[1] 西田幾多郎『西田幾多郎全集　第六巻』、燈影社、1998 年
[2] 高梨友宏「＜芸術論＞としての西田哲学―西田幾多郎の対フィードラー関係をめぐって―」『美学』186 号、1996 年
[3] Marcello Ghilardi, Una logica del vedere. Estetica ed etica nel pensiero di Nishida Kitaro, Mimesis, 2009.

２．研究の目的

本研究においては、今まであまり研究が行われてこなかった西田幾多郎の美学について、次の 3 点を目的として、時間論からのアプローチを行ない、 同時に関連文献をイタリア語に翻訳する。

１）西田の思想の発展に伴う芸術哲学の変化を、時間論との関係において論考することを試みる。
２）晩年の西田の芸術論に見られる「ファンタスマタ」という概念を通して、西田の芸術論と時間論を結び、ヴァールブルク、デリダを中心とした西洋美学・哲学の観点から比較・考察する。
３）上記２点を行なうために不可欠な作業である、西田幾多郎の著作のイタリア語への翻訳および注釈を順次出版し、イタリアをはじめとしたヨーロッパに向けて研究成果を発信する。

３．研究の方法

本研究においては、西田の全著作において、「時間」の概念がどのように記述されているかについて抜き出し、各時期の記述を西田の思想展開の中で跡づける．特に、西田の時間論と美学、存在論の関係について、他の哲学者と比較を行ないながら、ドイツ、イタリアの研究協力者と議論を踏まえつつ、考察を行なう。

そのためには、これまでと同様、西田の著作のイタリア語訳を引き続き行ない、著作を精読するとともに、イタリアにおける西田幾多郎全集の出版活動も続ける。

４．研究成果

本研究では、西田幾多郎の美学について、時間論からのアプローチを行ない、同時に関連文献のイタリア語への翻訳を行った。その作業に付随して、西田の思想の発展に伴う芸術哲学の変化を、時間論との関係において論考することを試みた。

西田の美学において特徴的なのは、初期の『芸術と道徳』に見られるように、芸術を「身体の活動」とその時間性ととらえている点である。スピノザの言葉を借りて言えば、「私たちは私たちが永遠的であるのを感じ、経験するのである」(『エティカ』、5p23S）のように、初期西田でも身体で「今」の経験を深めるのが芸術的体験の特徴であると思われる。しかし、それ以降、後期の著作に至るまで西田の時間論が変容し、そのため芸術的な経験に対する考えがどのように変わってきたのかについて、深く追求する試みは世界的にも多くは行なわれきていない。

平成 28 年度には、先ず早期の西田の時間論について分析しなおす必要から、『善の研究』を再度精読し、自身が以前出版したイタリア語翻訳を見直す作業から着手した。その結果、西田全集イタリア語版の第１巻として『善の研究』(2016，改訂版)を出版するに至った。また、前研究課題によって得た着想である、晩年のデリダの「幽霊」が中心になる時間論と西田との比較を継続し、白隠禅師、デリダにおける「幽霊」と西田を比較した論考を出版した。平成 29 年にはヨーロッパ日本学会（EAJS）にてこの論考について発表することもできた。ヒルデスハイム大学での夏季集中講義においても、西田と美学、幽霊に関してとりあげ、招待講演も行った。これらの研究成果をまとめ、Bloomsbury 社から発行された *The Bloomsbury Research Book of Contemporary Japanese Philosophy* (Michiko Yusa 編, Bloomsbury Academic, New York, 2017）に“Bodily Present Activity in History - An Artistic Streak in Nishida Kitaro’s Thought”と題した論文を掲載することができた。平成 30 年度には、さらにパドヴァ大学での招待講義を機に、中期～晩年の西田の時間論について、まとめるとともに、翻訳も進め、西田全集イタリア語版の第２巻として『思索と体験』(2019)を出版した。

５．主な発表論文等
（研究代表者に下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

Enrico Fongaro (2018), Can Westerners Understand the Arts of Other Cultures and What Might They Learn by Doing So? A Long- Distance Dialogue, Journal of World Philosophies, pp. 93-122.（査読有）

Enrico Fongaro (2018), Corporeità e desoggettivazione nell'estetica interculturale di Kitaro Nishida, Scenari, pp. 201-222.（査読有）

〔書評〕（計 1 件）

エンリコ　フォンガロ（FONGARO, Enrico）（2017）「Ryosuke Ohashi (Hg.) Die Philosophie der Kyoto-Schule」,西田哲学会年報, pp. 131-134.（査読有）

〔学会発表〕（計　12 件）

Enrico Fongaro (2016), Nishida Kitaro’s Philosophy and his Theory of Art, Workshop Eastern Philosophy and Thought facing Art（国際学会）, Univeristy of Padua.

Enrico Fongaro (2016), On the Ambiguity of Nishida’s Translation in Italian, International Conference of Japanese Philosophy（国際学会）, 九州大学.

エンリコ　フォンガロ（FONGARO, Enrico）（2016）,「西洋哲学から見た東アジアの哲学—イタリアにおける西田幾多郎のインターカルチャー的解釈を例として—」,「近代日本哲學與東亞」 國際學術研討會（招待講演）（国際学会）, 台湾大学.

Enrico Fongaro (2016), On the Aesthetics of Kitaro Nishida: Remarks on possible encounters between zen and contemporary aesthetics, ヘント大学日本学講演会（招待講演）（国際学会）, University of Ghent.

Enrico Fongaro (2017), Sul tempo nelle prime opere di Kitaro Nishida, Altri spazi, altri tempi. Per un'estetica trascendentale in chiave interculturale（招待講演）（国際学会）, University of Padua.

Enrico Fongaro (2017), The Meaning of Kata in Japanese Culture, 講演および集中講義（招待講演）（国際学会）, University of Hildesheim.

Enrico Fongaro (2017), How was Non-Western Philosophy born? Tetsugaku, Doctoral School（招待講演）（国際学会）, University of Ghent.

Enrico Fongaro (2017), Platonism and Ghosts - in Nishida's Early Concept of Time, 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）, University of Lisbon.

Enrico Fongaro (2018), Feeling and Thinking in Nishida, Feelings and Emotions in Philosophy（招待講演）（国際学会）, Utrecht University.

エンリコ　フォンガロ（FONGARO, Enrico）(2018),「翻訳における西田幾多郎の「感情」と「思考」」, 第68回東北哲学会（招待講演）, 東北大学.

Enrico Fongaro (2018), I giapponesi e la Seinsfrage: Goethe tra Heidegger e Nishida, Seminar of aesthetics（招待講演）（国際学会）, University of Padua.

Enrico Fongaro (2018), Fading "Furusato": On the Obsession with Origin, Furusato: 'Home' at the Nexus of Politics, History, Art, Society and Self（招待講演）（国際学会）, University of Venice Ca' Foscari.

〔図書〕（計 5 件）

エンリコ　フォンガロ（FONGARO, Enrico）(2017),「西田の時間論と白隠の「客」」,『比較思想から見た日本仏教』, 末木 文美士（編）, 山喜房佛書林, pp.200-221.（査読有）

Nishida Kitaro (Enrico Fongaro編・訳) , Uno studio sul bene, Mimesis (Milano)（『善の研究』）, 2016年, 全240頁.

Fongaro Enrico, "Bodily Present Activity in History - An Artistic Streak in Nishida Kitaro's Thought", The Bloomsbury Research Book of Contemporary Japanese Philosophy (Michiko Yusa編, Bloomsbury Academic, New York), 2017年, pp. 167-186.（査読有）

エンリコ・フォンガロ(2017)「廬山烟雨浙江潮 」,『わたしの日本学び』, 東北大学大学院文学研究科講演・出版企画委員会編, pp. 1-22.（査読有）

Nishida Kitaro (Enrico Fongaro編・訳) , Pensiero ed esperienza vissuta corporea, Mimesis (Milano)（『思索と体験』）, 2019年, 全284頁.

６．研究組織

(1)研究分担者　なし
(2)研究協力者
研究協力者氏名：マルチェッロ・ギラルディ（イタリア、パドヴァ大学）
ローマ字氏名：GHILARDI, Marcello

研究協力者氏名：ジャンジョルジョ・パスクァロット（イタリア、パドヴァ大学）
ローマ字氏名：PASQUALOTTO, Giangiorgio

研究協力者氏名：ロルフ・エルバーフェルト（ドイツ、ヒルデスハイム大学）
ローマ字氏名：EBERFELD, Rolf

研究協力者氏名：パウル・ツィッヘ（オランダ、ユトレヒト大学）
ローマ字氏名：ZICHE, Paul

研究協力者氏名：キアラ・ロッビアーノ（オランダ、ユトレヒト大学）
ローマ字氏名：ROBBIANO, Chiara

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。